

仮想討論会としてのフランス文学

藤原真実

はじめに、フランスからはるばる私たちの大学までお越しく下さいましたシルヴァン・ムナン教授とジュヌヴィエーヴ・アルティガス＝ムナン教授に、心から感謝申し上げます。

2013年12月、パリのソルボンヌ大学とアルスナル図書館において、ロベール・シャル『フランス名婦伝』の出版300年を記念する大規模な国際シンポジウムが開催されました。このシンポジウムを企画し、主催されたのが、ロベール・シャル学会会長ジュヌヴィエーヴ・アルティガス＝ムナン先生です。私はそのときはじめてムナン先生ご夫妻にお会いし、お二人の並外れた学識とお人柄のすばらしさに圧倒されたのですが、それより前から書籍や論文をとおしてご夫妻のご研究に接していました。とりわけ「系列」と「思想論争」をキー概念とするその方法論からは多くを学び、それが或る意味で私の研究やフランス文学の捉え方を方向づけてきたように思います。そこでまず、本研究集会のキーワードとなる「系列」と「思想論争」を私がどのように理解し、そうしたアプローチをこれまでの研究でどのように活用してきたのかをご説明したいと思います。ご夫妻の膨大な研究の全体を紹介することなど到底できませんが、このお話を通してその一面でもお示しできればと考えています。

思想論争 (débat d'idées) と哲学的地下文書 (manuscripts philosophiques clandestins)

最初に「思想論争」について、アルティガス＝ムナン先生がその研究書の中で見事に解明された哲学的地下文書のありように関連付けながらお話しします。¹

17-18世紀のフランスでは、印刷術の発達が頂点に達する一方で、夥しい数の哲学的地下文書が流布し、思想史を動かしていました。20世紀初頭、ギュスターヴ・ランソンは記念すべきその論文²の中で、当時の研究者らに、それらの手書き文書

の調査計画を提案します。アイラ・O・ウェイドによって始められたこの研究は、1987年、オリヴィエ・ブロックによる哲学的地下文書目録作成チームの創設（ソルボンヌ内）により大きく推進されることとなります。そして1993年、アルティガス＝ムナン先生がオリヴィエ・ブロックの後継者としてこのチームの責任者に就任し、今日もこの大事業を主導されています。

アルティガス＝ムナン先生は長い歳月をかけて、ヨーロッパ・ロシア・アメリカに散在する手書き写本を各地の図書館で調査されましたが³、その中で発見されたのが、哲学的地下文書の蒐集家・愛好家であり自ら写本を作ってもいたトマ・ピションの膨大な書類の山でした。アルティガス＝ムナン先生はこの書類を発掘・研究し、また無数の哲学的地下文書を分析した結果、それらの地下文書が単なる二義的なテキストではなく、「18世紀思想の本質的現実の表現」⁴であることを示す証拠を見出しました。

〔哲学的地下文書の中〕に見出されたのは、無限に可變的で、表現と教化の自由にも思想の実験と複製にも完全に開かれた巨大な知的作業現場、書くことと読むことの完全に交換可能な新しい方法が編み出される場としての巨大な知的作業現場である。こうして利用される手書き文書は、それがはじめから無署名であろうとなかろうと、絶えざる生成のうちにある生きた存在様式、万人に差し出された変形可能な素材、参加へのいざないなのである。⁵

ブノワ・ド・マイエの『テリアメッド』のような哲学的地下文書は、まとまりのあ

¹ Geneviève Artigas-Menant, *Lumières clandestines. Les Papiers de Thomas Pichon* (Paris, Librairie Honoré Champion, 2001) et *Du Secret des clandestins à la propagande voltairienne* (Paris, Librairie Honoré Champion, 2001).

² Gustave Lanson, «Questions diverses sur l'histoire de l'esprit philosophique en France avant 1750», *Revue d'Histoire littéraire de la France*, XIX, 1912, p.1-29. Cit. G.A.-Menant, *Du Secret des clandestins*, p.355.

³ *Lumières clandestines*, p.17.

⁴ *Ibid.*, p.313.

⁵ *Du Secret des clandestins*, p.369.

一つの著作でありながら、複数の書き手——ぶつかり合い、反論し合い、補完し合う複数の声を許容します。まさにそれが思想論争の生きた場なのであり、そのような自由、そのような表現の可動性を確保するためにこそ、それらの著作はあえて手書き文書のまま留まったというのです。アルティガス＝ムナン先生のこの目覚ましい発見のおかげで、私たちは思想論争の広大な現場を啓蒙の世紀の印刷本の中にも見出すことができます。『百科全書』のような偉大な哲学的著作のみならず、マリヴォー、ディドロなどの小説作品の中にもそれは見出されます。それらの小説はしばしば「発見された原稿 *manuscrit retrouvé*」のトポス、対話やポリフォニーの手法を用いますが、それはこれらの小説が、哲学的地下文書の生きた力を憧憬しているからではないでしょうか。そのように考えるからこそ、私は今日、アルティガス＝ムナン先生に啓蒙期の小説を論じていただけることをことさら嬉しく思うのです。

系列 (série) とは何か

次に「系列」の概念についてお話しします。

そもそも「系列」とは何でしょうか。シルヴァン・ムナン先生によれば、それは一人、あるいは複数の作家によって書かれた一連の文学作品で、互いに緊密な関係を持つがゆえに、個々の作品はこのつながり、この文脈に置き直されないかぎり十全に理解することはできません。

私がお例を挙げるとすれば、最も簡単なのは『美女と野獣』という物語の成立を「恋愛地図」と関係づけながらお話しすることでしょう。⁶ですがそのことは去年開催した研究集会でお話ししましたので、今日は『とさか毛のリケ』と題される物語を、やはり「恋愛地図」に関係づけながら、取り上げたいと思います。

周知のとおり、「恋愛地図」とは、人と人の間に芽生えた友情が愛情へと発展し

⁶ 以下4点の拙論を参照のこと。「Une lecture de *La Belle et la Bête* selon la Carte de Tendre», *Dix-Huitième Siècle*, n°46, p.539-559, 2014. 「『恋愛地図』の討論会——『とさか毛のリケ』の場合」, 『人文学報』第511号 (2015), p.321-339. 「『恋愛地図』で読む『美女と野獣』——連作的読解の試み」, 『人文学報』第466号 (2012), p.1-39. 「怪物と阿呆——『美女と野獣』の生成に関する一考察」, 『人文学報』第391号 (2007), p.47-87.

たり減んだりする過程を表した寓意図で、⁷スキュデリー嬢が1654年に発表した長編小説『クレリー』に挿入したものです。この「地図」は当時の文学サロンを中心に、恋愛をめぐる一大論争を巻き起こし、その結果として、非常に多くの文学作品が、「地図」に表現された恋愛のロジックを使って書かれました。その中にはラファイエット夫人の『クレージュの奥方』やラシーヌの『ベレニス』⁸、そして数多くの妖精物語があります。シャルル・ペローの『とさか毛のリケ』はそのうちの一つです。

「とさか毛のリケ」と系列

19世紀末には、『コルドバのイネス、スペインの物語』（1696）に挿入されたもう一編の『リケ』が再発見され、その作者がコルネイユの姪のカトリーヌ・ベルナルルであることがわかります。さらに今日では、ペローの『リケ』はカトリーヌ・ベルナルルの『リケ』を読んだうえで、それに対する応答として書かれたこともわかっています。二つの作品の間には単なる影響ではなく競合の関係、マルク・ソリアノの言葉を借りるなら「和気藹々とした競争compétition amicale」⁹、つまり同じ主題をもとに物語を作って競い合うような状況があったと考えられます。興味深いことに、カトリーヌ・ベルナルルの『コルドバのイネス』は実際にこの競争を描いており、小説内のこの場面で、イネスのライバルであるエレオノールが書いて発表したのが最初の『リケ』¹⁰なのです。

⁷ 地図の上にはタンドル（真心の愛）という名の国があり、この国に至る三本の河がある。一番目は「自然な好み」の河、すなわち一目惚れのルートである。二番目は「評価」の河で、才気や知性に関係する。三番目は「感謝」の河で、打算抜きの思いやりに満ちた愛情が必要とされる。註6の拙論を参照のこと。

⁸ Cf. Alain Viala, «Racine et la carte de tendre», *La Licorne*, Publié en ligne le 26 mars 2009.

⁹ Marc Soriano, *Les contes de Perrault : culture savante et traditions populaires*, Gallimard, 1968, p.193.

¹⁰ すでに指摘されているように、カトリーヌ・ベルナルルの『リケ』は、中世以来の猥談の流れを汲むラ・フォンテーヌの韻文のきわどい物語「娘たちはどんなふうに知恵を授かるのか」（*Nouveaux contes*, 1674）に着想を得て書かれたと考えられている。Cf. Ute Heidmann et Jean-Michel Adam, *Textualité et intertextualité des contes. Perrault, Apulée, La Fontaine, L'héritier...*, Classiques Garnier, 2010, p.312-313.

このように17-18世紀のフランスでは、同じ主題について複数の作家が競って作品を創作することがよくありましたが、そうして生まれた二編の『リケ』こそ、シルヴァン・ムナン先生の言う*série*（系列）として捉えられるのです。¹¹

二つの物語の粗筋をごく短くお話します。主人公のリケは才気煥発ですが容姿の醜い王子で、ヒロインの王女は極端な愚かさと美貌の持ち主です。あまりに愚かなせいで人々から疎まれ孤独に暮らす王女は、或る日リケ王子に出会います。リケは一年後に自分と結婚するという約束で王女に才氣を授けることを申し出ます。それを受け入れたとたん、王女に非常な才知が備わり、それを知った近隣諸国の王子らが求婚しようと駆けつけます。ここまでは二編の『リケ』の大筋はほぼ同じです。ベルナール版では、才知を得た王女は、求婚者の中でもひととき美貌のアラーダと恋仲になります。一年後、リケに再会し、その醜さを嫌悪しますが、結婚しないなら元の愚かな状態に戻ると言われ、仕方なく結婚します。しかし王女は密かにアラーダとの密会を続けます。ついに王女の奸計を知ったリケは、アラーダを自分と同じ姿にしてしまいます。最後まで目に見える魅力にとらわれ続ける王女は、皮肉にも二人のリケ、すなわち不細工な夫を二人も持つことになるのです。一方ペロー版では、一年後、リケは自分の容姿以外に王女の気に入らないものはないことを確認すると、相手のことを愛すればその人を美しくする能力が王女にも備わっていると教えます。王女はすぐにその能力を使うことを願うと、たちまちリケが「この世でいちばんすてきな男性」¹²に見え始め、王女は即座に結婚を承諾します。

ペロー版『リケ』でわかりにくいのは、この結末とその最後に付された二つの「教訓」が一見かみ合わないように見えるところです。二つの教訓は、愛の万能性と、愛が見つけさせる目に見えない魅力の優位性を説いています。しかし、愛が王女の心の変化にどのように関与したのかははっきり描かれていません。そのため読者の中には、王女がリケとの結婚を承諾したのはリケが美男子に見えたからであり、こ

¹¹ ムナン教授によれば、それらの作品は、個別に扱うのではなく歴史的連続性のうちに捉えられてはじめて正当に評価される。Luc Fraisse, «Entretien avec Sylvain Menant», in Luc Fraisse (dir.), *Séries et variations. Études littéraires offertes à Sylvain Menant*, PUPS, 2010, p.38-40.

¹² Perrault, *Riquet à la houppe* in Perrault et al., *Contes merveilleux*, éd. Tony Gheeraert, Honoré Champion, 2005, p.238.

こでも目に見える魅力の方が優位に置かれている、と考える人もいるでしょう。この物語がペローのほかの物語ほど理解も評価もされていないのは、こうした曖昧さのせいだと思われるのです。

系列的アプローチで解消するペロー版『リケ』のわかりにくさ

そのような問題を解決してくれるのが、シルヴァン・ムナン教授の系列的アプローチです。すでに述べたように、2編の『リケ』は系列をなしており、ペローの『リケ』はベルナル版『リケ』を知っている読者によって読まれることを前提として書かれています。¹³さてベルナル版のリケは、愚かな王女に才氣を授ける際に、次の呪文を唱えるように言います。「あらゆるものに命を吹き込む愛よ、愛するすべを知るだけで、愚かでなくなるというのなら、私の準備はできている。」¹⁴ベルナル版の王女は愛するすべを知り、才氣を手に入れますが、彼女はその才氣を美貌の恋人を愛するためだけに使います。一方、ペロー版にはこの呪文は存在しませんが、二つの教訓がそれに応えています。「自分が愛する相手の中では、何もかもが美しく、何もかもが賢い」「もう一つの教訓／自然が人に授ける美しい目鼻立ちや、芸術が到達しえないほどの顔色をもってしても、愛がそこに見出させるたった一つの目に見えない魅力ほどに心を動かすことはできない。」——ペロー版では、リケと一年後の結婚を受け入れた王女は才知を獲得しますが、愛する準備ができただけで、まだ愛し始めてはいません。一年後、彼女はその才知を用いて、リケの中にある見えない魅力を見出します。ペローはこの場面の後に次の一節を加えています。「〔一部の人々〕によれば、姫は〔リケ〕の根気強さや慎みや彼の心と精神のあらゆる美点についてよく考えるうちに、彼の不格好な体や醜い顔が目に入らなく

¹³ 一つの例を挙げるなら、ベルナル版で、リケは地下世界に住むこびとの王として登場する。ペロー版ではリケと地下世界の関係は言及されないが、リケの婚礼の前日、王女の足下の地面が突然開いて、地中で宴会を準備するこびとたち現れる。このことはベルナル版を読んで初めて理解されることである。

¹⁴ «Toi qui peux tout animer, / Amour, si pour n' être plus bête, / Il ne faut que savoir aimer, / Me voilà prête.» Catherine Bernard, *Inès de Cordoue*, *Œuvres*, tome 1, éd. Franco Piva, 1993, p.358.

なったということです。』¹⁵万能の愛が介入するのはまさにこのときです。すると王女にはリケが世界一すてきな王子に見えるのです。こうしてペロー版はベルナール版の「呪文」に集約された愛の万能性という同じ主題を用いながら、その恋愛論——美しいから愛され、醜いから嫌われるという単純な恋愛論に反論しています。ペロー版における愛はもっと複雑で不可思議です。美醜の問題さえ乗り越えさせる力を持つのですから。

このように、二つの『リケ』は系列的な関係にあります。それぞれの作品の意味や方向性は、シルヴァン・ムナン先生の系列的アプローチを使うことではじめて十全に理解されます。またそれらの作品間には愛の問題をめぐる「思想論争」があり、その論争は、言うまでもなく、『クレリー』とその「恋愛地図」が展開した愛をめぐる論争に繋がっています。「恋愛地図」に関係する多数の物語は、物語同士が論争を行うような形で系列（セリー）を形成しています。これを私は過去の論文で「仮想討論会」と呼びました。¹⁶まさにそのような複数の作品の関係性とありようは、ムナン先生ご夫妻の研究に感化されてますます鮮明に見えてきたものです。今日この大学でお二人にそのことを直接講じていただけることを大変嬉しく思います。

¹⁵ Perrault, *Riquet à la houppe*, éd. cit., p.238.

¹⁶ 註6に挙げた拙論を参照のこと。